Title	寺崎恵子氏報告　子どもの島：ルソーのイメージ（＜児童＞における「総合人間学」の試み研究）
Author(s)	田澤，薫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-4：2-4
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2674
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

＜児童＞における「総合人間学」の試み研究

寺崎恵子氏報告　子どもの島　―ルソーのイメージ―

田澤　薫

ニューズレター第２号で既報のとおり「子どもの『領分』研究」を共通テーマとして開始された今年度の＜児童＞における「総合人間学」の試み研究会であるが、その第２回目研究会が６月30日㈬18：00 ～ 20：00、聖学院大学４号館第二会議室において開催された。

研究会では、寺崎恵子研究員（聖学院大学児童学科助教）により「子どもの島　―ルソーのイメージ―」と題する報告がなされ、その後、参会者により活発な意見交換がなされ、時間を一杯にして会を閉じた。報告の概要は以下の通りである。

ジャン・ジャック・ルソー J.J.Rousseau（1712 ～ 1778年）の『エミール　または教育について』（1762年）は「子ども」を焦点に議論が尽くされている感があるが、子どもは人生のある一時期であるという点についてのルソーの理解についてはあまり知られていない。

まず始めに、研究会の共通テーマ「子どもの領分」に関連して、「領分」ということばには「隅、角、端、曲がり角、人目につかない秘密の場所、果て、領域、窮地」と多くの意味があり、隅っこの目立たない場所という共通のイメージを持つことが確認された。市川浩がいうところの「生きられる空間」を参考にすれば、子どもは、弱い者として隅にいる人と考えられる。子どものもつ弱みには、弱み特有の性質、例えばあいまい、捉えどころがない、不定形態にある、予測不能、不確実さがある。鷲田清一の『＜弱さ＞のちから』によれば、弱さを持つからこそ、他者に関わりを誘発する存在である。

さて、ルソーの『エミール』は、ルソーの後半生に書かれた作品である。この作品の教育思想史上の意味を中内敏夫の『教育思想史』から考えると、教育は大人の側が子どもの才を引き出すという従来の見方に対して、『エミール』の公刊によって、教育を子どもの学習活動への助成的介入の行為と見る、つまり消極教育（éducation négative）の考え方が表れ始めたとなる。つまり『エミール』は、教育観を転換させていくはたらきを持った。ルソーが「子ども期」をどのように捉えたのかを考えておかねばなるまい。

以下、『エミール』の内容を検討する。

Educationは、学校教育に限定されず、広く人生に関わることである。ルソーは、educationの基になるeducatioというラテン語の意味を取り上げている。「産婆は引き出し、乳母は養い」という表現があるように、educatioは、educereとeducareという２つのかたちを持つ。つまりそれは、母と子と、そしてそれを助ける第三者による「産み」と「育て」である。そもそもeducation、éducationは、産婆や乳母も含めた女性と子から成り立つ三者関係である。さらに意味を加えるなら、educatioは「育む」という意味、未成熟な弱きものを包む意味を含むと考えられる。それから、educatioは栄養を与えることだが、「栄養を与える」にはnutrireというラテン語があり、これは今の英語のnurseやnurseryへと発展していく。中内敏夫によれば、educare、「乳母は養い」を表わしたeducareが、「栄養を与える（nutritio）」というラテン語と結び付いていくことになる。

「ただ一人の指導者に従うべきだ」については、educatioが三者関係によって成り立つ説明に矛盾するようにみえる。一人の指導者とは、自然という偉大な指導者の指示に従って子どもに添い立つ（「育つ」は、「添い立つ」を語源にも持つという説がある）指導者を意味し、これによって新たなéducation関係を形成するとルソーは考えているのではないか。大人と子どもとの関係であるéducationにおいて子どもは弱いものである必要性があり、それに添い立つ者、育てる者の必要性が

生じる。éducationは植物の栽培に例えて説明される。「私たちは弱いものとして生まれる、私たちには力が必要だ、私たちは何も持たずに生まれる、私たちには助けが必要だ、私たちは分別を持たずに生まれる、私たちには判断力が必要だ、生まれたときに持っておらず、大人になって必要となるものはすべて教育によって与えられる。」つまり弱いものとして生まれたものが、やがて成長する過程で必要になるものはすべてéducationによって与えられると考えられている。

ところで、エミールは実在の子どもではなくフィクション・仮構の設定で、一種の思考実験である。また、エミールは孤児と設定されており、親子関係を免れて大人と子どもの関係を考えていこうとしていると考えられる。そして、作品のもう１人の重要な人物、つまり、ただ一人の指導者である「わたし」が語り手になる。指導者は、教育に携わるにふさわしい年齢、健康状態、知識あらゆる才能を持つ。指導者の役割は、父母の義務を引き受ける（in loco parentis）ことにある。

生後一人前になって自分自身の他に指導する者を必要としなくなるまでが子ども期であり、教育（éducation）の時期となる。子ども期をさらに区分して、それぞれの時期の状況を示すことをルソーは考えた。『エミール』は、序から始まり第１編から第５編まであるが、子どもの時期25年間を５つに分けて、子どもの状況・コンディションを知る、というしくみを持たせている。つまり子どもの成長は連続ではなく、断続して起こると考えられる。

『エミール』の草稿を見ると、ルソーは、12歳までが自然の時期、15歳までが理性の時期、20歳までは力の時期、25歳までは賢明の時期、そしてその後の人生は幸福の時期ととらえている。『エミール』において示される子どもは、以下の６点で説明される。

まず、子どもは25歳位までで、大人以前の状態にある人である。２つめに、子どもは大人と異質であり、その質は弱さで説明される。この弱さは強さの欠如ではなく、強さを持つ以前の不均衡な不安定な状態である。３つめに、「子どもである」というのは、enfanceとadolescentというこの２つの性質を持つ状況で構成されている。enfanceは「子ども」「幼児」と訳されるが、ルソーはフランス語の中にふさわしい言葉がなかったからということで、生まれてから三期に当たるまでの頃をenfanceととらえ、５つに分けたうちの残りの二期をadolescent青年期とし、変換期の15歳ごろを第２の誕生と言い換えている。第２の誕生をもって指導者であるわたしは本格的にéducationに関与すると述べ、指導者も「誕生」にかかわる。４つめに、子ども期はかなり長い。５つめに、大人になるまでの間、１人の指導者が子どもに付き添う。６つめに、大人と子どもとのかかわり合いのひとつのかたちがéducation である。このとき、enveloppe（包まれた状態）からdevelopper（開くこと）を大人と子どもとのあいだに起こるéducationと読みとることができる。

このようなルソーの子ども期のとらえ方は、ヒポクラテスやセビリアのイシドルスなど歴史上の子ども期のとらえ方と比較すると類似点が明らかである。とくにイシドルスは人生を輪、円環、サイクルとしてとらえた。ルソーも、始まる・生きる・終わる・始まる・生きる・終わるという円環としての人生のイメージを持っていたと考えられる。

ところで、『エミール』が小説として書かれたことから、読者の大人が読書という個別経験を通じて子ども期を確認していく作業を、ルソーは企図したことになる。

ルソー自身は『エミール』が新しい育児書として読まれることに否定的だったが、時代的要請のなかで『エミール』は育児書として影響力をもった。『エミール』を契機に従来の育児法を改める反省が起こったと指摘される。それまでの育児方法、さらには親としての生き方を変えて新しくしていこうという気持ちが読書経験から生れた。同

じ時期に、伝統的な育児法は衰退し、家族関係は閉じていき、閉じた家族関係において育児が行われるようになる。読者である若い親たちは、未経験なことを『エミール』で確認し、現実の子どもの育て方を創出することで「子ども期」を補償するかのような育児を生み出した。また、『エミール』の影響を受けて、子どもを主人公にした子ども向け作品が次々と作られた。仮構をみる（読む）ことで大人は自身の中に子ども像を確認でき、その子ども像を基にして子どもを見る。このときの子どもは、大人の意識の端っこに存在が確認されてから、子どもを見る大人の眼のなかに現れる。子ども向けの作品は大人にとっての鏡であった。

中川久定は、『エミール』の当時は舞台や小説のモチーフに島が多く使われたと指摘する。表出された島は現実の社会を逆照射する機能を持った。リアルに描かれたものが人々にとって欠陥を知る機会となることが小説を読む思考実験のなかに起こっていた。「島」は、周りから突出した場所である。あるところから島へ移るには、渡るか飛び越えなければならない。『エミール』に、「あの世を期待しつつ、君の地上の楽園、パラダイスをつくりだすのだ」とある。この楽園は渡った先のことを思い描いたものである。草稿版にあったように、子ども期の後の人生は幸福な時期であり、子どもである時期とはそれを思い描くときであり、理想の楽園を作り出そうとするのが子どもの役割だと語られている。ルソーは島つまり囲われた地に住む幸福感を考え始めていた。そして、島、つまり小説にライフステージつまり人生の舞台モチーフに載せられていた子どもを『エミール』は語っていく。

子どもというのは人生の一角を占める者であって、子どもとして生きることが大人によって保障される。弱さを持つ子どもには「包む」「連れ添う」関わりが必要であり、これがeducationである。「包む」「連れ添う」の両方を担うのがあの指導者の役割である。

educationが「包む」という性質を持つことは、大人になった時点で子どもがそこから出ていく必要を生む。大人になるということは包という関係を解除していく。子どもの時期を終えた者は、educationから解除される者でもある。ただ、エミール自身はこれに失敗した。指導者のいう通りに育ったエミールは『エミールとソフィ』のなかでソフィという女性と出会い、離婚をし、educationで学んだことは崩壊するという経験をした。

ルソー自身について付言すれば、生後まもなく母親を亡くしたことで、母のようなものと関わる「包」という部分が欠落をして育ったといわれる。その意味では『エミール』で、ルソー自身は失われた子ども期を補償したのではないか。ルソーは晩年島にこもり、そして埋葬された。ルソーは時代の子として島の中に眠り、そして「子ども」も島で生きる幸福な理想的な子どもであると『エミール』の中で説明できる。島は人生の中ではほんの一部ではあるけれども、そのほんの一部の部分が実は島全体の意味を持ってくるという、錯綜した作品が『エミール』である。

参考文献

J.J.ルソー、今野一雄訳『エミール』岩波文庫、1962 ～ 64
市川浩『〈身〉の構造―身体論を超えて』青工社、1984
鷲田清一『〈弱さ〉のちから―ホスピタブルな光景』講談社、2001
中内敏夫『教育思想史』岩波書店、1998

（文責：たざわ・かおる　聖学院大学人間福祉学部児童学科准教授）